

## AST 活動による医療経済効果について

2018年度の診療報酬改訂で抗菌薬適正使用支援加算100点の新設がありました<sup>1)</sup>。この加算は、通称AST (Antimicrobial Stewardship Team) 加算と呼ばれ、算定要件の専従職種の中に薬剤師が明記されています。薬剤師には、抗菌薬適正使用として、適切な抗菌薬の選択、適切な用法・用量、適切な投与期間に加え、医療経済学的な視点からの費用対効果についても考慮するASTの中心的メンバーとして活躍することが求められる時代になりました。そこで今回は、AST活動による医療経済効果についてTOPICSとして挙げました。

まず、2016年に公表された米国感染症学会および米国医療疫学学会による抗菌薬適正使用プログラム実施のガイドラインにおいて、以下のClinical questionに対する費用対効果について言及されています<sup>2)</sup>。

図1. 米国感染症学会(IDSA)/米国医療疫学学会(SHEA)の推奨の要点より抜粋

Clinical question	推奨	コメント
入院患者に対する静注抗菌薬において、特化した薬物動態(PK)のモニタリングと投与量調整プログラムは臨床的アウトカムの改善や <b>費用の削減</b> につながるか？	病院でアミノグリコシドの薬物動態モニタリングと投与量調整プログラムを行うことを推奨する。病院でバンコマイシンの薬物動態モニタリングと投与量調整プログラムを行うことを提案する。	薬物動態モニタリングと投与量調整プログラムは、 <b>費用や副反応を減らさうる。</b>
抗菌薬適正使用プログラムではアウトカムの改善と <b>費用削減</b> のために入院患者における広域β-ラクタム剤とバンコマイシンのPK/PD(薬力学)理論に基づく用量調節を推奨すべきか？	抗菌薬適正使用プログラムでは、 <b>費用削減</b> のために入院患者における広域β-ラクタム剤のPK/PD理論に基づく用量調節を従来の用量よりも推奨すべきである	広域β-ラクタム剤におけるPK/PD理論に基づく用量調節がアウトカムを改善するというデータはまだ限られているが、これらの介入は抗菌薬の <b>費用削減</b> につながる。
抗菌薬適正使用プログラムではアウトカムの改善と <b>費用削減</b> のために経口抗菌薬の使用を増やすための介入を実施すべきか？	抗菌薬適正使用プログラムは、初期治療に用いる内服抗菌薬の適正使用および静注抗菌薬から内服抗菌薬への適切なタイミングでの切り替えの両方を推進するためのプログラムを実施すべきである	適切な内服抗菌薬の使用を促すプログラムは <b>費用と入院期間を削減</b> させることができる。

抗菌薬適正使用支援加算の算定要件には、「院内に抗菌薬適正使用支援のチームを設置し、感染症治療の早期モニタリングとフィードバック、微生物検査・臨床検査の利用の適正化、抗菌薬適正使用に係る評価、抗菌薬適正使用の教育・啓発等を行うことによる抗菌薬の適正な使用の推進を行っていること。」と記載されており、IDSA/SHEA ガイドライン上のClinical questionに対する推奨・コメントと類似する点が多いことがわかります。また、「抗菌薬の適正使用に向けた8学会提言」においても「抗菌薬適正使用支援は、感染症専門の医師や薬剤師、臨床検査技師、看護師が個々の患者に対して主治医が抗菌薬を使用する際、最大限の治療効果を導くと同時に、有害事象をできるだけ最小限にとどめ、いち早く感染症治療が完了できる(最適化する)ように支援を行うことを目的としています。その結果、耐性菌の出現を防ぐ、あるいは遅らせることができ、医療コストの削減にもつながります。」と明記されています<sup>3)</sup>。つまり、AST活動を実践することにより、新たに加算されるだけでなく、医療費の削減にも繋がっているということです。

実際に、岐阜大学医学部附属病院では、AST活動により1人当たり2,926円節減でき、年間1,904万円の薬剤費が節減できたと報告しています<sup>4)</sup>。また、入院期間も1.7日間短縮されており、医療費節減効果は年間3億円にも上ると試算されています<sup>4)</sup>。昨年は、サチュロ錠®、ゾフルーザ錠®、シベクトロ®、スピラマイシン錠®、ダフクリア錠®など新規の抗微生物薬が多く上市されました。こうした新薬に対しても費用対効果を考慮した適正使用がAST活動には求められます。医療経済学的な視点からもAST活動を実践するための各医療機関における環境整備の促進やAST活動の中心となるべき薬剤師の育成が期待されています。

### <参考文献>

- 1) <http://hica.jp/ASP/AST20180207.pdf>
- 2) <http://hica.jp/ASP/ASPguideline2016japanese.pdf>
- 3) <http://www.jscm.org/m-info/154.pdf>
- 4) [https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjphcs/39/3/39\\_125/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjphcs/39/3/39_125/_pdf)